

令和7年度 第3回 学校運営協議会 議事録

日時 令和8年 1月 29日 (木) 午後2時から3時30分まで

会場 ふじのくに国際高等学校 会議室

出席者 委員3名中2名及びPTA会長

1 校長あいさつ

この地区でもインフルエンザが猛威をふるい学級閉鎖をしている学校があると聞く。健康への留意を。今年度の学校の取組について御意見いただきたい。そして、来年度に向けてもよろしくお願いしたい。

2 報告及び協議

(1) 学校経営計画に関する自己評価について【校長】

<以下発言内容を要約>

- ・ICT活用は前進したが、「個別最適」は課題であると感じている。
- ・探究・学習意欲は昨年より向上した。非認知能力の研修を継続する。
- ・安心安全の数値は低下した。生徒数増加が影響。環境づくりを継続する。
- ・探究による自己理解は中間年次で伸びた。カリキュラムの効果があらわれている。
- ・防災意識は改善することができた。今後も地域・家庭とも連携強化していく。
- ・教育相談の体制については肯定的な回答が多かった。
- ・IBの理解・実践は広がりつつある。広報を進めていく。
- ・働き方改革は、業務集中による時間外労働が課題。平準化を進めたい。

(2) 各分掌重点取組に関わる評価・課題について【副校長】

<以下発言内容を要約>

- ・探究による自己理解工場の割合が大きく向上した（中間年次）。
- ・防災意識は35→76%と大幅改善した。
- ・ボランティア活動等に意欲的に参加したと答えた生徒の割合が向上した。
- ・生徒の教員への相談しやすさは、73→80%と向上した。
- ・教員のIBスキル向上は研修・IBWM（IBウィークリーミーティング）の成果が現れていると思われる。

3 学校関係者評価に関わる協議

委員A IBWMの取組はすごくいいと思った。それ以外の取組はあるか。

校長 これ以外の取組では、IB科目担当者の会議を開催している。

委員B 2年目となり、どういう学校なのか具体的に分かってきた。ボランティアや探究の成果は数値に表れている。安心して過ごすことが

できるという点で、数値が落ちているところが気になるが、生徒の人数が多くなるということはそういうことだと考えている。

成果目標に 100%とある項目があるが、目指す姿としては理解するが、これは達成できる現実的な数値なのか、ということが個人的な感想である。

委員 A 他校の数値目標は、内容によって幅を持たせている学校もある。項目によるが 80%~90%や 90%程度の表記、例えば教員の手立てについては 100%、生徒の回答は 80%など。

委員 B 100%という数値について、項目ごとに検討をしてみてはどうか。

委員 C 取り入れる、工夫するといった項目の目標が 100%のところ 70%、80%になっていると、やっていないと思ってしまう。

防災についての取組として、生徒に主体的に考えさせるのは良いと思う。自分の子どもを見ていると、危機感が足りないように感じる。危機感を持てるような指導ができたらいいのではないか。

校長 防災に関しては、この学校の現状としては非常に難しいと感じている。現在の防災訓練は、特別日課時に実施されており、HR 単位で行っているが、学校生活がスタートすると、実際は個々に選択した授業に分かれていて、HR 単位の防災訓練の現実味が薄れる。その中でどうするか、課題感がある。現実に応じた訓練をどのようにしたらよいかは課題。地域からは、高校生は支援の担い手につながる取組をして欲しいとの期待もある。

委員 A 単位制で一人ひとりの時間割が異なることから、昼間は生徒が来ているのか、来ていないのかの把握、夜間では停電の場面(暗闇の中)での避難体験をどうするか。手立てや、逃げる方法を周知することが重要だと考える。

委員 B 「キャリア形成の支援」にある、「おしゃべり未来支援室」とはなにか。

職員 A すき間時間を使って気軽な気持ちで進路相談ができればと考えた。5, 6 限や夕休みに、生徒たちを対象とした講座や模擬試験について、公務員対象者への説明会、総合型入試の説明などを行った。

委員 B 生徒の進路希望の傾向はどうか。

職員 A 就職希望が 2 割程度、残りは専門学校や大学など、進学を希望している。

委員 B 就職希望が 2 割ということであるが、商工会や商工会議所などで模擬面接など高校生向けの事業がある。必要であれば、声をかけてほしい。

職員 A 今年度は 2 月 20 日に就職者向けに講座を行う予定である。来年度

になったら、面接練習など、商工会議所の方にも是非協力をお願いしたい。

委員A 年度途中で退学をし、進路変更をした生徒の状況を教えてほしい。

職員B 自分の学業に向けて方向転換する生徒や、学校不適合のケースなどである。

委員A 中学校のときに不登校傾向にあった生徒の様子はどうか。

職員C 個々の状況に応じて異なる。

校長 長期間学校に行っていない、ある期間行っていなかった、などの経験がある生徒が在籍している。全体的には、高校になって切り替えている生徒が多い。このような生徒に対応できることがこの学校の価値でもあり、指導の成果が表れていると考える。

職員D クラスがない、自分のペースで進められるなどの良さがあるのではないか。生徒たちは、多様な生徒を認めることができる。そのような集団になりつつある。学年が上がることに自覚は出てきており、目標に向けて努力する生徒が徐々に出てきている。

委員A どのあたりを詰めていくかを考え、中学校に説明することが必要。説明だけでは現状とのねじれが生じてしまう。本校ができることを説明していくとよい。

委員B 図書館は特殊な機能があるのか。

教頭A IB ワールドスクールの認定を受けていることもあり、IBに関する本は充実している。ライブラリーサポーターとなった生徒たちが、子どもたちの視点で本を選んで紹介し、より興味を持ってもらうため、ポップを作成も行っている。

校長 多くの学校では、自習ができる場所として職員室前に机を用意し、生徒たちが先生に質問できる環境をつくっている。本校は、生徒によって学校が始まる時間が違う。それぞれの生徒が登校して、それぞれの場所で過ごす。図書室を居場所としている生徒もいる。それぞれがそれぞれの場所で過ごす場所があることが、この学校の特徴ではないか。

委員B ライブラリーサポーターは、生徒が自分で手を挙げたのか。

教頭A そのとおり。

委員B 交通安全に関して、2件の事故の内容は。

職員E 交差点での信号無視で車と接触したことと、交差点で車と接触したことの2件。

委員B 原付で通学している生徒はいるか。

職員E 条件付きで登校してよいことにはなっているが、現在はいない。

校長 交通事故防止に向けての取組を、学校全体で進めている。

- 職員E 具体的には、警察と連携して交通安全教室を実施、免許の取得に関しては、グッドマナー講習会への参加、また交通安全への呼びかけを、定期的にCラーニングを活用して行っている
- 校長 今年度は定期的な取組ができています。道交法の改正が行われ、高校生が加害者になるケースも想定している。
- 委員C 県教委が行った研修であったが、地域の方との触れあい、地元企業とのつながり、このようなことで将来、地元に残ってもらい、地域も盛り上がっていく。交通の利便性や交通事故を減らすという観点からも今後バスが通ることあるのか。
- 副校長 他校において、高校入試当日の朝のバスや電車の本数が少なかったため、鉄道会社に相談をしたケースがあったが、当該の鉄道会社の判断により、希望は叶わなかった。
昨年度は、本校生徒が地域の公共交通に関するワークショップに参加したが、意見交換が主旨の会であった。
- 校長 学校で通学バスを用意していた学校もあるが、維持できなくなった経緯もある。
いくつかの学校で協力して、交通手段を確保できる手段を考えたりもした。しかし、運営側、公共交通を充実させることの難しさ、課題が分かった。今後は、地域によって公共交通機関が設定できない場所の交通手段を考えていかなければならないと思う。
- 委員B 島田市では、交通の見直しを昨年から実施をしている。バスの赤字の解消について、小中学校の統廃合によるスクールバスについてどう運用するか、など。川根ではライドシェアの実施が予定されている。利用者として、高校生がその議案には上がっていない。市として話を進めてほしいと話をしてきた。
- 委員A 非認知の研修を行っていてどうか。先生方の率直な話、先が見えているか話をいただきたい。
- 職員A 一人の生徒を見取る、生徒の様子を見る目を持つことができた。その結果、授業の中で、向けられる視点が増えた。非認知のテストの振り返りを見たが、客観的に自分が見えてきた。生徒たちの自信や自己肯定感の高まりにつながったのではないかと。継続して指導していると、日々の変化が分からなくなってしまうことがあるが、改めて気づくことができる。